

ASO
:KTH



そのドアを開ける

雨野 小夜美

夢見るバンギャ

こんな田舎には縁が無い サマーソニックノットフェス
バンドなんてオワコンだよ
音源買うお小遣い無い 衣装着ていく場所が無い
バンドなんてオワコンだよ

バッグに好きなバンドのカラビナが光ってる
中毒ブラックホール

朝食はたぶんカレーだったよ 温めるやつだよこぼしたよ
クスリ漬けで吐きそう自分が嫌い 激しくヘドバンの後みたい

バンドなんてオワコンだよ
オワコン自体がオワコンだよ
あたしの人生が一番オワコンだよ このままじゃ

ギターの音がひびかない そもそもFが弾けてない
音源10月末金が無い 立って歩いてヘドバンみたい
キャリーバッグ買ったけど動けない ライブの日は診察動けない
派手かわTシャツ動けない カラビナ見つめて動かない

オワコンだよ

あの日youtubeのオススメで 出逢った運命の人
夢見るバンギャ 高校中退 彼のために
冷めていくブラックホールは 一度きりの高熱なんだ
髪はパサパサブリーチメッシュ カタギの人には見えないな
中毒に吸い込まれていった 彼のカラビナ握りしめて

ひとりで家を出て ピンクのキャリーバッグひいて歩いていく
不確かな道ほど確かなものは無いって心が背中を押した
夢見るバンギャ カモられてるだけ 彼の目を見ていた

踊り続けて おかしくなって あたし宗教みたい
「ありがとう」って叫んでた 一瞬通じた気がした

あたし オワコンだよ
カラビナが不気味に 黒い光を放った
クスリ一個足りない どこへ落としたんだろう？
あたし オワコンだよ

カラビナ ブラックホール 黒目であたしを見つめる
彼の黒目を思い出す 売ったライブDVD思い出す
もう恐ろしく押し売られてて 不確かな10代感情思い出す
せめて もう一回

夢見るバンギャ あの頃の気持ち 忘れてないよ
いつかライブへ行きたいな いつかライブへ行きたいな
オワコンで手すりの無い道を 這いつくばって歩こうか
じゃないとあたし オワコンだよ
目を閉じてまた開けてみる 何も変わらない日常
思い描いた夢と違うから 目覚めたんだな

夢見るバンギャ いつかライブへ行きたい いつかライブへ行きたい
このカラビナをくれた彼のライブへ行きたい
届かないさ フレグランスはスパイシー とっておきの衣装で見つめるんだ
このカラビナ くれた彼の ライブへ行きたい

朝食クスリ覚えてない ギミックグロウルどうでもいい
このカラビナ くれたバンドの ライブへ行きたい
カラビナじゃなくなったら 夢じゃなくなったら
バンギャじゃなくなったら きっとお守りだよ

オワコンなんてオワコンだよ

頭から倒れたパープルの枕 ブラックホールに中毒なんだ

カラビナがどこまでも妖しげに光った 絶対壊せないもの見つけた

あゝ あゝ あゝ あゝ

おまへは桜の木の散る下で

「もう死んでもいい」といふ

だつてモノトーンが余りに綺麗だから

おまへのはいからな衣装は

こんな田舎の桜には似合はない

生きて上京せよところからいつた

上京したおまへに

手紙をしたためた

まだおまへの桜は綺麗なのかと

桜散りぬその後は

あゝ あゝ あゝ 薄毛

汽車といふ黒い鉄の乗り物に乗る

おまへを思い起す

昔の賢者は「桜の下で死にたい」と

詠んだといふ

おまへは命を捨ててはいけない

京の桜となれ

落ち葉を踏む

しやり しやりと音を立てて

あゝ あゝ あゝ 薄毛

あみだくじ

どの道を選んでも正解なんだよ
必ず たどり着くよ
結果はすべて違って すべて正しい

声に出してしまった時点で
その未来とはさよならだけど
いつか いつか
願ってもなかった願いが叶うんだ

光を背負う意味を考えて
いつかキミの役に立つはずだから
夜空に爪を立てる日もあるでしょう
それも見つめないと何も始まらない

あみだくじを 指でなぞる
その仕草 かわいいね
どれを選んでも楽しいよ
ハズレには必ずストーリーがある
願ってもない 楽しい未来しか 叶わないよ

かなり 勇気のいることでしょう
両親を捨てて道を選ぶことは
いつか キミも苦しむときがあるでしょう
道は折れ曲がる
急に 行ったり来たり

真っ暗の中に残されて
泣きながらただ走ると決めたとき
キミの行く先に 光はあるでしょう

あみだくじを小さな指で なぞるキミに
ステキな未来がありますように

生まれた

朝起きて

羽ばたくための服を着る

流行を追うブサイクだったのは過去の話

今日もきっと何も起こらないわ

でも 何か起こるかもって 楽しみにしている

そんなにメイクはしないかな

眉毛だけはしっかり強く描くのよ

他人の生き方に流されないように

何か起こるかもって

楽しみにしている時間が 一番楽しいのだとしても

この楽しさは 止められない

ベイビー

私は26歳で生まれたわ

ノートもキャンバスも無いところにだけ 落書きしたくなるのよ

年を重ねて 残り時間が減っていきなんて

思わない 思えない

26歳になるまでは

「本当の自分」というのをさがし続けたわ

テレビや雑誌の立ち読み

そして見つけた

本当の自分は ここにしかない

大事なのは 生活

生活は 誰にもまねできないアート

残り時間というものは

減っていくのではなく 濃くなっていくもの

洗濯は毎日するわ

髪は2日に1回 洗うわ

服がどれだけ 色あせていこうと

手に入れた自分は あせていかない

26歳になった夏

自分から 羽を授かったあの雨の日 あじさいの下

マダムになったって

私は悪ガキだと思うんだよ

今日もきっと 何も起こらないわ

洗濯終わったら

何か起こしてみせるから 楽しみに待っていて

ベイビー

私は26歳で生まれたわ

羽を授かる前の人生なんて

自分が自分でない人生なんて 生まれていないのと同じよ

ベイビー

私は大人として生まれたわ

今は 後悔も反省もしていない

約束

君に昨日送ったよ
一曲しか入れなかったコピーCD
消えなくなったら
どうか聴いてほしい
もし自分がミュージシャンで
君にあんなのが書けるんだったらもう
ずっと生きていたい
時が過ぎても生きていたい

君のいない世界にいるほど辛いことってないんだよ
生きる意味がわからなくて途方に暮れたら
私のために生きてください
いつか笑って逢いたいから
どこへも逃げずに待ってるから
お互い消えないでいよう
その日が終わっても

メールも見えていないし電源も切ってる
たぶんCDの感想さえ生涯聴くことはないだろう
音楽しか趣味ないの
信じるものなんてただひとつあれば生きていける
仕事が行き詰まって
いつか嫌になったときがあったら
裏切られたら
悲しいほど君をここで待っている人がいるよ
他のどいつが君を見捨てても
私は必ず待ってるから
生きる理由がわからなくなったら
私のために生きてください

隠れキリシタン

ねえ 真っ暗なところにも怖くないんだよ
僕には信じるものがあるから
曲がりはあるけど 折れはしない それって隠れキリシタン

ねえ 台風すごい風で 停電したって怖くないんだよ
竜巻が来たら 地下室へ行くよ
そして やっぱり台風や竜巻じゃなくて 君の事を考えてるだろう

ねえ 昔読んだ小説で 追い詰められたら走馬灯が出てくるじゃない
それってバカみたいだよ 本当に追い詰められてない人のセリフ
走馬灯でも 両親の顔でもなく 君の事しか浮かばなかった

ねえ 僕は 100個以上の詩を あなたに向けて書いています
ただひとり あなたを想って書いています
そんなに少なくないか 高尚なパチンコのやりすぎです

ねえ 丸一日 ただ汚い飯を食って何もする事もなく寝る
そんな死んだゾンビのような生活を 送っています
それでも走馬灯も 両親の顔も 浮かばなくて

ねえ 真っ暗なところにも怖くないんだよ
僕には君がいるから
それって 隠れキリシタン
竜巻と失った日は地下室で もう君の事ばかり

バニラノート

クランベリージュース 口づけ ホテルの部屋に残した
君との旅行 思い出すの なぜだろう

ペットボトル 間違えて 凍りついた
あれが最後の水だったのに

バニラノート どちらかというと ココナッツの香りだけど
パッケージが 胸の焼けるような色
バニラノートを ひと吹き この部屋を南国に染めて

帰りたい 帰りたい 君と泳いだプールへ
ココナッツジュース 口どけ ボブがしょう油をかける
ブラックコーヒー 苦いのが好きになったフードコート
屋台で 最初で最後の 空色のワンピース買ったんだ
片言の英語で値切ってさ 君はひとめぼれ
熱苦しい風が 二人の間を過ぎる 窓のないバス

帰りたい 帰りたい あの南国へ
ひとりぼっちの三日月 忘れられたらいいのに
南国の思い出の砂とか そんなものいらないから
バニラノート ひと吹きで 気持ち悪い位 苦しくなる
虫が泣く夜 早く終わってほしい日々 南国へ連れて行って
帰りたい 帰りたい

地球が丸い海の岬の その吹き抜けのてっぺんで
鼓動がはじけて 写真を撮った
ワンピースから 香るバニラノート
今もそのときも 南国の香りは変わらないままで
階段をかけ上がるときめき 寂しさあふれた自撮りのアルバムをめくる
黄色い綱がもう終わりだよって告げて バスをふさぐ
帰りたい 帰りたい あの南国へ 帰りたい

糸電話

人と喋っているだけ
なぜ胸が痛いんだろう
人と喋っているだけ
伝わらない事 通じない事 選べない事 色々

君と喋っているだけ
なぜ胸がキリキリ 痛いんだろう

糸電話があればいいなって
いつかきっと そう思うんだ
僕らの呼吸を 孤独をつなぐための

でも糸電話が無いとつながらない
関係なんて要らないから
やっぱり このままがいい

なぜ胸が痛いんだろう
それは人が好きだからだよ
もっと わかってほしいからだよ
なぜ胸が痛いんだろう
それは 君が好きだから

引きこもりドリーマー

きっと 僕がビッグすぎるから アンチがいっぱいいるんだ
今年初めて見た秋のうろこ雲 僕ほどはビッグじゃないな

部屋をめちゃくちゃに埋めつぶす 夢

大器晩成って言葉があるでしょう 僕は一発屋じゃないな
イモを見ればわかる まだそこそこしか芽が出てないからね

器がもう大きすぎて フツーに大きすぎて
ライバルも友達もないよ 愛読書はジャンプとサンデー

足の踏み場もない ドアをふさぐ 夢

何年後かわからないけれど 僕はビッグになる
今のうちにサインでも もらっといた方がいいよ

コンビニでマンガを立ち読みしながら 芽に水をあげてるんだ
つぼみが開くまでは 引きこもりドリーマー

ふくらみすぎて 床が抜けそうな 夢

レジ係の人 群がる買い物カゴ なぜ気付かないんだ
僕はその制服の人よりずっとビッグなのに

帰ってあとはコウモリ的な ビッグな夢を見るよ
メリケンのピザみたいに 傾けないとドアを通れない夢

むりやり入れてもあきらめない夢

きっと僕はビッグすぎるから 太陽もビビって早く沈むんだ
僕は春夏秋冬なんてもう超越してる

きっと僕はビッグすぎて引きこもりになったんだ
何か星をつかむまでは 踊る引きこもりドリーマー

きっと僕がビッグすぎるから 誰もついてこれないんだ
なら僕はもっとビッグになろう 皆がついてくるくらいに

一番星

ベッドの中に 一番星 見つけたよ
オブラートのシーツの中に くるまれているよ

部屋を暗くすれば するほど光るよ
オブラートの中で 両手のかげの中で

有名人になったときの インタビューを妄想してた
6畳の部屋で 昼は掃除機かけてた
サインの練習とか 延々としてた
間違っってそうな筆記体

部屋の中を もっと暗くするよ
もう寝るから スタンドライトも消すよ

ベッドの中に 一番星 涙くらい光るよ
両手で とじこめようとするよ

触れたとたんに 消えてしまうよ
部屋が本当に 真っ暗になるよ

涙くらい光るよ 流れるかぎり光るよ
とじこめようとするよ 消えてしまうよ

涙くらい光るよ 数えるかぎり光るよ
冷たいのは星だよ 消えてしまうよ

有名人になったときの 写真のポーズとか考えていた
内股で映りたくないな 顔はちょっと横向けて
掃除が終わったら 夜が来るまで体操座り
サインの練習を やっぱりしてた

つまらなくて わけがわからなくて
ペンを放り出して オブラートのシーツ蹴っとばして
夜の散歩っていう 嘘をついた
そして見つけたんだ 一番星

ベッドの中の一番星なんて きっと涙だよ
外へ出て 現実世界の星を 追いかけてようと
ちょっと寒いよ
知らないよ 走るよ
届かないよ
一番星を追いかけて
立ち並ぶ看板 夜の街 階段を下りて

一番星

あきらめれば あきらめるほど光るよ
あきらめないかぎり光るよ
涙くらい光るよ
流れるかぎり光るよ
現実の中で 光りたいよ

ピース

ねえ知ってる？

僕らは失くしたたった一つのピースを
埋めるために生きてるわけじゃない
空の厚紙の状態で痛み生まれて
たくさんの人からピースをもらうんだ

争いの終わらない日本では
傷つけ合うなんて珍しくもないや
どんな気持ちで集合写真に写ったの？
ただの抜けがらでもピースして笑う
ピースをもらってははがれ落ちてゆく

たぶんひとりじゃない
でもきっとそんなにたくさんでもない
僕のピースを持つ人達がどこかにいて
きっと同じように 僕が持つあなたのピースで
あなたは自分のパズルが埋まるのを待ってる

これが本当のピースなんだ
みんなに出逢って 確かめて パズルが埋まったら
心配しなくても大丈夫 ただ一個の旅が終わるだけ
世界樹の下で 出逢ったあなたに包まれて
本物の笑顔の写真を撮ろう みんなで手をつないで

みんなでピースを交換して 名前呼びあって
みんなでピースをお互いあてはめて
いつか夢に出てきた 世界樹をかこんで笑いながら
それぞれのピースをつくり上げたそのとき

争いは終わるんだ

そのドアを開けろ

<http://p.booklog.jp/book/109430>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109430>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109430>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ